

# JFSTA NEWS

## contents

巻頭言.....	1	会務報告.....	12
トピックス .....	3	編集後記.....	12
水産研究・教育機構からの情報 .....	6		

### ▶ 巻頭言

## 「技術者魂」

一般社団法人全国いか釣り漁業協会 中津 達也

大学の水産学部を卒業して水産庁に入り、長く行政の仕事をしていました。本音の所は水研に入って「魚の研究」をしたいがために公務員試験を受けましたが、研究者に向かないと思われたのか、行政に配属されました。

行政官として研究関係に携わるようになったのは、研究指導課で研究調整班長をやっていた時で、技術協会の和田会長が同じ課で有明海問題などの仕事と一緒に取り組む中で、研究者とのお付き合いも増え、論文等も拝見するようになりました。

その後、別の課に異動になっても研究・技術開発関係の仕事をやらせていただき（水産庁の人事担当が研究好きなことによく気が付いた?）、公共事業調査担当の時には、技術協会の原統括本部長のポイントを押さえた研究計画には驚きました。

自分では調査・研究を主体的に行ったことはありませんが、「門前の小僧習わぬ経を読む」で、研究論文や調査報告を読んでいることは楽しいので、自然と知識は増えてきたようです。

これまでの知識や経験をまとめたいと思い、技術士（水産部門）の試験にも挑戦しました。試験対策に関しては、技術協会（3回目の登場）の小山さんからご指導をいただき、2回の試験を幸運にもパスし、平成18年に技術士の資格をいた



写真1 北西太平洋におけるアカイカ操業



写真2 漁獲されたアカイカの船内凍結(左)と製品の水揚(右)

だくことができました。これでようやく「技術者」を名乗れると思いました。

水産研究・教育機構などでの勤務を経て、現在は、縁あって全国いか釣り漁業協会に勤めています(写真1~3)。業務内容は漁業調整がメインで、調査・研究とは縁遠い仕事かと思っていました。しかし、いか釣り漁業の経営対策を考えるに当たっては、海洋環境の変化に対する理解、スルメイカ資源やアカイカ資源の実態と今後の動向の把握など、科学的な知見やデータに基づく対応が求められました。これには、開発調査センターでのLED漁灯実用化試験や北水研でのスルメイカ資源評価で得た知識や人脈が役立ちました。

また、昨年のスルメイカTAC問題に際して、会

員であるいか釣り漁業者に対し、いか釣り漁業のTACを他の漁業種類に譲っても不足することは考えられず、むしろ社会的環境を考慮すると譲るべきであることを説明しました。これには、研究所や試験場からの今後の漁況や資源動向に関する情報等が説得材料となるなど、これまでの経歴のなかで培ってきた研究者の方々との人脈が役に立っています。科学的なデータの裏付けが、科学的な漁業調整に結び付けられることを改めて実感した次第です。

「研究者」にはなり損ねたものの、振り返ってみれば、水産庁での業務を含めて「技術」を軸に「技術者」として仕事を続けてきたように思います。これからも「技術者」として「技術者魂」を持って仕事に取り組んでいきたいと思っています。



写真3 シーフードショーにおけるいか類製品の販売促進(左)とアカイカを使った握りずし(右)

研究者にとどまらず、色々なキャリアを持った関係者が「技術者」として現場を支えているのが水産の世界です。全国水産技術協会が、これからも、その名の通り全国の様々な「技術者」に開かれた、風通しの良い組織であることを期待しています。

## 令和7年度 水産研究・教育機構と全国水産技術協会の懇談会

2026年1月20日（火）14：30～18：30まで、AP虎ノ門（東京都港区西新橋1-6-15 NS虎ノ門ビル）を会場に、令和7年度の水産研究・教育機構と全国水産技術協会の懇談会を開催しました。水産研究・教育機構からは中山一郎理事長ほか15名の役職員の皆様にご出席いただき、全国水産技術協会からは、会員や賛助会員の皆様に協会の役職員を加えた25名が参加しました。

沿岸域での各種の開発事業にともなう漁業・養殖業や漁場環境への影響評価やそのための調査研究は、当協会の会員・賛助会員にとって共通の関心事項ですが、最近の気候変動の進行や洋上風力発電事業の進展などにもない、評価の対象や内容が多様化し、調査研究手法の高度化も求められています。そこで今年度は「沿岸域の資源・海洋モニタリング」をテーマに、水産研究・教育機構水産資源研究所水産資源研究センターの社会・生態系システム部長である黒木洋明博士に「沿岸の資源・海洋のモニタリングー歴史的データの解析から数値モデリングまで」のタイトルでご講演いただきました。また、関連して、全国水産技術協会から「水産・海洋分野における海洋ロボティクスのこれから」について話題提供を行いました。ご講演、話題提供の概要は以下の通りです。



開会挨拶（中山理事長）

### 1. 講演「沿岸の資源・海洋のモニタリングー歴史的データの解析から数値モデリングまで」

黒木洋明部長には、4つのサブテーマに分けて、水産研究・教育機構の水産資源管理研究所が取り組んでおられる資源・海洋モニタリングの成果や現状についてお話いただきました。

第1のサブテーマ「明治から令和の漁業統計から探る」では、明治期から近年に至るまで、漁業生産統計に基づく沿岸性の魚介類や海藻量類の都道府県別生産量について、都道府県庁所在地の緯度経度により地理的重心を求め、その経年変化を検討した結果が紹介されました。歴史的な生産統計資料を活用する上での新たなアプローチを示した意欲的な取り組みでしたが、全ての魚種で、重心は周期的に変動しながら長期的には北東方向に移動しており、わが国近海における地球温暖化にともなう海面水温の上昇の影響が



講演者 黒木部長（左）と和田会長（右）

示唆される結果となりました。一方、魚種によって変化の程度は異なっており、今後の温暖化に対応した分布・回遊の変化を考える上で、ベースラインとなる成果が得られました。

第2のサブテーマ「底泥試料から探る」では、仙台湾と女川湾を対象に、東日本大震災(2011年)の前後での底泥中の植物プランクトン群集の組成を比較調査の結果が紹介されました。具体的には、津波による海底泥の一新が渦鞭毛藻類の減少など生物多様性の変化をもたらす一方、ろ過食者である養殖カキの生産量が激減したことにより植物プランクトン現存量が増加したことが明らかとなりました。こうした突発的な攪乱からの生態系の回復過程のモニタリングは、学術的な側面だけではなく、漁業・養殖業の展開など産業面でも重要であり、継続した取組みが期待されます。

第3のサブテーマ「環境DNAから探索する」では、近年技術的進展の著しい環境DNAに基づくわが国周辺での主要な魚類資源の分布状態とこれまでの海面水温の変化との関係の解析結果に基づき、将来予測される気候変動の下での分布域の変化や被食-捕食関係などの魚種間関係について検討を進めている状況を紹介いただきました。これまでの検討を通じて、分布域の変化の大きな東北・北海道や南西諸島などでは、漁業のあり方自体も転換を余儀なくされる可能性が示唆されるなど、今後の水産資源管理や効果的な利用を考える上で重要な取組みであり、一層の進展が期待されます。

第4のサブテーマ「海洋物理モデルから探る」では、近年、全国の内湾域における共通課題であ

る貧酸素水塊及び栄養塩循環の問題について、伊勢・三河湾を対象に、栄養塩等についての継続したモニタリングと、外海との海水交換についてのモデル研究の結果が紹介されました。具体的には、湾内でのアサリ漁獲量や養殖ノリの生産量が減少する2010年代中頃以降、外海からの栄養塩の供給が弱まる一方、海底堆積物による栄養塩の季節的な蓄積と放出により、湾内の栄養塩濃度の季節変化と陸域からの負荷量の季節変化にズレが生じていることが示されました。

伊勢・三河湾における栄養塩管理については、全国水産技術協会も水産庁プロジェクトに参画し数値モデルによる管理効果の評価・予測を担当しています。今回、ご紹介いただいた内容はモデルの初期条件の設定や結果の解釈にあたっての貴重な情報であり、今後も、水産研究・教育機構による調査研究と連携しながら成果の向上に努めていきたいと考えています。

## 2. 話題提供「水産・海洋分野における海洋ロボティクスのこれから—海洋無人機(Unmanned Maritime Vehicle: UMV)の活用を軸に」

全国水産技術協会の和田時夫から、海洋ロボティクスを、海上及び海中における調査研究を含む各種作業を自律的に行う機器、あるいはその運用のためのハード・ソフトウェアを含むシステム全体と定義した上で、内閣府総合海洋政策推進事務局の主導による「AUV官民プラットフォーム」の動きなど、わが国における海洋無人機の導入・活用状況と、海洋無人機を含む海洋ロボティクスを水産・海洋分



会場風景



野の事業に導入する場合の課題や方向性などについて紹介しました。また、個々の経営体が海洋ロボティクスを構成するハード・ソフトウェアの全てを自前で抱えることは、資金的にも技術的にも負担が大きいことから、今後はシステムや装置を所有・運用する企業・団体によるXaaS (X as a Service)型のビジネスが拡大していく可能性などを指摘しました。

講演、話題提供に引き続き同会場において懇

談会が開催され、講演や話題提供の内容や関連する話題などについて活発に意見や情報の交換が行われました。

最後になりましたが、ご講演いただいた黒木洋明部長、ご参加いただき、幅広くご懇談いただいた水産研究・教育機構の役職員の皆様、全国水産技術協会の会員および賛助会員の皆様に御礼申し上げます。

(和田時夫／全国水産技術協会)

## ブックレビュー

みなもと としふみ

源 利文 『環境DNA入門-ただよう遺伝子は何を語るか』

岩波科学ライブラリー 315 岩波書店 2022年11月 (1,200円+税)

環境DNAとは、生物から海洋や河川、土壌などの環境中に排出された排泄物、脱落した表皮、死骸などに含まれるDNA断片のことである。環境DNAの分析が、生物の分布状態の把握など生態調査における新しい手法として注目されたのは今世紀に入ってからである。しかし、その後の発展には目を見張るものがあり、調査研究にとどまらず開発事業による生態系影響の評価などにも広く用いられるようになっていく。

著者はこの分野の草分けの一人である。本書は、「DNAはただよう」、「環境DNA」の発見、「いるかないか、どれだけいるか」、「川ごと、国ごと、時空も超えて」、「ただようDNA、未来へ」の5つから構成されている。著者自身の環境DNAとの出会いから、試行錯誤のエピソードも交えつつ、特定の種の同定を目的としたDNAバーコーディングから現在の分析手法の主流である多数種の網羅的な解析を目的とするDNAメタバーコーディングへの発展過程と、今後の展望が紹介されている。

本書においても随所で紹介されているが、塩基配列を解読するための次世代型シーケンサーの発達・普及をはじめ、膨大な解読データを処理するための統計学的手法やワークステーション、種の同定に適した塩基配列部分の特定とその増幅技術、種の同定にあたり基準となる塩基配列のライブラ

リーなども、環境DNAを用いた研究開発が発展・普及する上で欠かせない要素であったと言える。

ところで環境DNAは、対象とした水域の周辺の状態、人間活動や他の陸上生物の存在などにより、分析結果が大きく影響されることがある。本書でも、京都府舞鶴湾でのマアジの現存量調査において、魚市場の付近でのマアジのDNA量が著しく多かったことが示されている。環境DNAの分析において注意を要する予期しないDNAのコンタミネーション(混入、汚染)につながる話であり、慎重な試料採取が求められることはもちろん、結果を適切に解釈出来るよう、試料採取時の周辺情報の収集にも留意が必要なことを示している。

最近、著者を含む研究グループにより、わが国沿岸の魚類相を環境DNAにより網羅的に解析し、分布・移動への制限要因としての海流系の役割を明らかにした論文\*が公表された。気候変動が進むなか、将来の魚類分布や生物多様性の変化を検討・予測する上での1つのベースラインとなるものである。環境DNA分析の新たな展開として期待したい。

\*Osada, Y. et al. Large-scale environmental DNA survey reveals niche axes of a regional coastal fish community. Scientific Reports (2026).

■ 刊行物



**FRAnews vol.86 クロマグロ (2026年3月発行)**

多くの関係者の資源管理による協力により資源量が回復してきた「クロマグロ」の特集や、インタビュー「専門家に聞きました」を掲載しています。

以下のURLからお読みいただけます。

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/book/franews.html>



**おさかな瓦版 No.129 ウミガメ (2026年1月発行)**

**おさかな瓦版 No.130 マダイ (2026年3月発行)**

No.129では「ウミガメ」を、No.130では「マダイ」をテーマに、写真で生態などをわかりやすく説明しています。

以下のURLからお読みいただけます。

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/book/kawaraban.html>



■ ピックアッププレスリリース

**赤潮原因プランクトンの天敵を発見！**

**— 寄生生物を用いた赤潮プランクトン防除に期待 —**

**(2026年1月16日)**

カレンア・ミキモトイは、アジアを中心に世界

中の海域で赤潮の原因となるプランクトンで、日本の過去30年間における本種による漁業被害金額の総額は、90億円にのぼると報告されています。

東北大学と当機構などからなる研究グループは、赤潮プランクトンに高い寄生性を有する新規

の寄生性渦鞭毛藻 (*Amoebophrya sp.*) を大阪湾から世界で初めて発見し、その単離・培養に成功しました。さらに、この寄生生物は、珪藻などの無害なプランクトンには寄生せず、安全性が高いことを示しました。

将来的には、この寄生生物を「天敵製剤」として利用することによって、全国で発生する赤潮プランクトン防除法の開発への応用が期待されます。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260116\\_press.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260116_press.html)



## 瀬戸内海のイカナゴが突然減った謎に迫る —環境変動で捕食される危険性が高まったことが原因— (2026年2月5日)

広島大学と当機構の研究グループは、瀬戸内海東部で春季の主要な漁獲対象種であるイカナゴの漁獲量が2017年に急減し、その後も低水準が続いている要因を調査しました。その結果、水温の上昇と餌不足といった環境変動が重なったことで、2016年にイカナゴが捕食される危険性が急激に高まり、これが2017年の漁獲量の急減につながった主要因であることを明らかにしました。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260205\\_press.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260205_press.html)



## 微小液滴技術を用いた海産微細藻類の ハイスループットスクリーニングを実現 —有用餌料用微細藻類の効率的な探索が可能に—

(2026年2月5日)

当機構、東京海洋大学、株式会社オンチップ・バイオテクノロジーの研究グループは、効率的な微細藻類スクリーニングが可能な手法を開発しました。これまで、新たな有用餌料用微細藻類の探索には時間と手間がかかっていましたが、本手法では、直径約0.1mmのほんのわずかな一滴で、様々な微細藻類を、1細胞レベルでわけて、種間競争を含む細胞間相互作用の影響を抑えて培養を可能にしました。この方法は従来の液体培養と遜色がありませんでした。天然海域で本手法を用いたところ、従来法の約2倍の種数を採取できました。また、1分間あたり約7万細胞という速度で微細藻類細胞の分離が可能になり、桁違いに高いスクリーニング効率が見られています。

近年、微細藻類は、海産養殖業の高品質な餌料、バイオ燃料、機能性食品、環境浄化など、様々な分野での利用が期待されています。本手法は、新規有用株の発見を加速し、将来的な水産業および関連産業の発展に貢献することが見込まれます。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260206\\_press.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260206_press.html)



## 四半世紀の観測でわかった冷たい北の海 の変化 —カムチャツカ半島沖の海の酸性化や生物

## 生産の推移—

(2026年2月18日)

人間活動で排出された二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)は、陸上の温暖化だけでなく、海の温暖化・酸性化など、海洋環境に対しても様々な変化を引き起こしています。本研究では、水産資源が豊富なカムチャツカ半島沖の北緯47度、東経160度の定点の1999-2023年までの25年分の海洋観測データから、海洋表層で地球温暖化にともなう「温暖化」「低塩化」を確認し、温暖化は日本近海よりも1.87倍も速く進行していたことが分かりました。また、海洋へのCO<sub>2</sub>の取り込み増加で「海洋酸性化」が進行していること、その程度は世界平均とほぼ同じであることも初めて明らかにしました。また、10年規模の長期に渡り栄養塩を観測した結果、「春(5月)に増加、夏(7月)に減少」を新たに発見し、これは植物プランクトンのケイ藻類が大規模に増殖する時期が太陽光の低下の影響により遅延していることが原因と示唆されました。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260218\\_press-kamchatka.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260218_press-kamchatka.html)



## カツオの眼球の分析から回遊履歴を推定する手法の開発に成功

(2026年2月18日)

海洋生物の生涯の移動の追跡は、生態学や水産科学の大きな課題です。特に、かつお・まぐろ類は数千kmの長距離移動をするため、回遊の把握は困難でした。

電子標識を用いたバイオリギングは、バッテリー寿命から生涯の移動は把握できませんでした。この課題を克服するため、カツオ眼球の水晶体に蓄積された同位体比を解析してふ化してから漁獲までの回遊履歴を推定する手法を開発しました。

この手法で漁獲したカツオ33個体の回遊経路を推定した結果、熱帯域で漁獲した個体は全て熱帯域付近に留まっていたましたが、日本近海で漁獲した個体は熱帯域から北上してきた個体が含まれていることが明らかになりました。本手法により日本に来遊するカツオの回遊生態等を明らかにできると考えています。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260218\\_press-katsuo.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260218_press-katsuo.html)



## 河川起源物質が沿岸酸性化を広域で緩和

(2026年2月20日)

国立環境研究所と当機構の研究チームは、日本の河川水が日本沿岸を含む北西太平洋(20-50°N, 120-160°E)に与える影響を、20年間の貨物船や観測船による観測データを使って調べました。その結果、河川水の影響は、沿岸に限らず平均で約250km先、黒潮の蛇行期には約350km先の沖合まで及ぶことが分かりました。また、河川水のミネラル分が「天然の緩衝材」として機能し、酸性化の進行を約7割まで和らげていたことも初めて定量的に示しました。一方で、河川水中の有機物分解による二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)放出の効果と、海水より低い水温と「天然の緩衝材」等によるCO<sub>2</sub>が吸収しやすくなる

効果は、ほぼつり合っていることも確認されました。これらの成果は、陸と海のつながりが沿岸の環境変化へ与える影響を理解する上で重要な知見となります。

本プレスリリースの概要は以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260220\\_press.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/20260220_press.html)



## ■イベント報告

### 2025年11月2日、第20回ながさき水産科学フェアを開催しました。

本フェアは、当機構の長崎庁舎、環境資源研究センター、長崎県総合水産試験場と連携して実施しました。

長崎庁舎の会場では、594人の来場がありました。ちりめんじゃこ観察会、タッチプール、海洋生物展示、ペーパークラフト、おさかなクイズ、ペーパーフィッシュ釣り堀、研究ポスター展示、ニホンウナギの仔稚魚展示、まぐろ飼育研究施設見学さらに人事課の就活相談などを実施しました。また、サイエンスカフェでは3つの講演を行い、普段なかなか聞けない海や魚の話に多くの質問が寄せられ、盛り上がりを見せました。各企画は大変にぎわい、来場者の皆さまに楽しんでいただけました。ながさき水産科学フェアは来年以降も開催予定です。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/gijutsu/events/nagasaki\\_event\\_2025-2.html](https://www.fra.go.jp/gijutsu/events/nagasaki_event_2025-2.html)



### 2025年11月26～28日、「アグリビジネス創出フェア2025」に出展しました。

東京ビッグサイトで開催された「アグリビジネス創出フェア2025」に出展しました。展示ブースでは、「魚肉の賞味期限を延長させる簡易型灌流器具の開発」、「新たな飼料・育種・養殖システムの技術導入による次世代養殖システムの開発」、「水産増養殖産業イノベーション創出プラットフォーム」、「水産研究・教育機構の社会連携、技術資産」について、動画やポスター等により紹介しました。

ほかにも、生研支援センターのSIPブースでは沖合での次世代養殖システムについて、ムーンショットブースではミズアブ餌料について、農林水産技術会議事務局のブースではブルーカーボンの活用について、研究成果を紹介しました。

27日の出展者プレゼンテーションでは、水産技術研究所の今村グループ長が「魚肉の賞味期限を延長させる簡易型灌流器具の開発」を、28日のセミナーでは、水産技術研究所の安藤主任研究員が「昆虫を活用した食品リサイクルによる養殖魚用飼料の開発」を講演しました。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/agribiz-exhibition\\_2025\\_report.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/agribiz-exhibition_2025_report.html)



### 2025年11月30日、釧路庁舎一般公開を行いました。

あいにくの雪予報でしたが761人の来場がありました。調査で獲れた生物の冷凍標本、顕微

鏡でのプランクトンやマイクロプラスチックの観察、海水成層水槽実験、ロープワーク講座、海獣類の標本展示、大人から子どもまで楽しめるおさかなクイズ、白衣や船員服の着用体験、自分で作れるペーパークラフトの配布などを実施しました。北の海の多様な魚介類の展示とタッチプールは人気が高く、子どもたちの歓声があがっていました。当機構マスコットキャラクター「ふーちゃん」も登場し、会場を盛り上げました。

アンケートには、「子どもたちがとても興味津々で楽しんでおり、いい経験になった」「普段海の生き物とふれあう機会はなかなかないので貴重な体験だった」「来年もまた来たい」などの意見がありました。

今後も、一般公開を通して、多くの方に海の素晴らしさや、研究成果を知っていただき、業務への理解を深めるきっかけになれば幸いです。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/kushiro2025\\_report.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/kushiro2025_report.html)



## 今年1月16～18日、「釣りフェス2026」に出展しました。

パシフィコ横浜で開催された「釣りフェス2026」に、水産庁と合同で出展しました。当機構は、缶バッジ作り、ポスター展示、溪流釣りのルールを分かりやすく解説する「魚つりのはなし」を実施しました。3日間を通じて多くの方にご来場いただきました。

缶バッジ作りでは、当機構と包括連携協定を結ぶ女子美術大学の学生が描いた、釣り人になじみのシイラ、キハダ、ヒラマサ、サクラマス、クロマグロなどのイラストを用意しました。ポスター

展示では、「クロダイ利用のための食味特性の把握」について、ノリ養殖に食害を及ぼすクロダイの有効利用について、冬にマダイに匹敵する食味となる可能性を示しました。「魚つりのはなし」では、研究者の解説に来場者が真剣に耳を傾けていました。「分かりやすかった」「釣りのルールを知る機会がないので、聞けてよかった」などの感想もあり、好評でした。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/report\\_tsurifes2025.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/report_tsurifes2025.html)



## 今年2月21～23日、「Deep of Wonder——不思議な深海の生き物たち」に協力しました

葛西臨海水族園で開催されたイベント「Deep of Wonder——不思議な深海の生き物たち」に協力しました。初日はトークイベント、2～3日は深海ラボに分けて開催されました。

トークイベントでは、水族園から深海生物の採集方法や輸送技術の説明と、当機構の櫻井研究員から「深海漁に密着調査！未利用資源の新たな可能性」をテーマに、これまであまり利用されてこなかった深海魚の活用の可能性について紹介しました。

「深海ラボ」では、当機構の調査船「若鷹丸」で採取した深海魚の実物を展示しました。「じつはおいしい深海生物」として、テナガダラやシロゲンゲ、ココノホシギンザメなど、食用可能でも一般には流通量が少ない魚種も紹介しました。来場者からは「おいしそうで食べたい」、「どこで買えるの?」、「食べられるとは思えない見た目だけど、どんな味なのか食べてみたい」など、さまざま

な感想をいただきました。

当機構では今後も、深海魚をはじめとする低利用・未利用資源の研究に取り組み、資源の有効活用に貢献してまいります。

低利用・未利用魚についてはFRANEWS Vol.77でも紹介していますので、ぜひご覧ください。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/topics\\_report0221-23\\_kasai.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/topics_report0221-23_kasai.html)



## 今年2月25～26日「第23回シーフードショー大阪」に出展しました。

大阪市のATCホールで開催された「第23回シーフードショー大阪」に出展しました。

展示ブースでは、「新たな飼料・育種・養殖システムの技術導入による次世代養殖システムの開発」、「簡易鮮度（K値）計測装置」、「食卓からもわかる水産業～イカナゴ加工品を例に～」 「水産増養殖産業イノベーション創出プラットフォーム」 「水産研究・教育機構の社会連携、技術資産」 「水産大学の取り組み」について、動画やポスター、実物展示により紹介しました。

機構特別セミナーでは、「水産物の鮮度指標と簡易鮮度（K値）計測装置の開発」、「黒潮大蛇行にともなう海洋環境の変化と漁業の状況」、「食卓からもわかる水産業～イカナゴ加工品を例に～」の講演をしました。講演後も展示ブースで活発な議論が行われました。

生物系特定産業技術研究支援センター主催セミナー「BRAINが薦める5つの最先端水産技

術」では、「フリー配偶体を使ったワカメ養殖の強靱化」、「ミズアブを使用した魚類養殖用昆虫飼料の効果と将来」の講演を行い、たくさんの聴講がありました。

イベントのようすは以下のURLからご覧いただけます。

[https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/seafoodshow\\_202602\\_report.html#90](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/event/2025/seafoodshow_202602_report.html#90)



## ■当機構ウェブサイトをリニューアルしました。

X（旧Twitter）、Facebook、YouTubeともどもよろしくお願いたします。

水産研究・教育機構のページ  
<https://www.fra.go.jp/>



X (旧Twitter)



Facebook



YouTube



X (旧Twitter) [https://twitter.com/fra\\_go\\_jp](https://twitter.com/fra_go_jp)  
Facebook <https://www.facebook.com/fra.go.jp/>  
YouTube <https://www.youtube.com/channel/UC1ITVadqC6P9vmHAUieAN9Q>

## 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構  
経営企画部広報課

住所：〒221-8529

横浜市神奈川区新浦島町1-1-25

GRC横浜ベイリサーチパーク 6階

TEL：045-277-0120（代表）

URL：<https://www.fra.go.jp/>

## ▶ 会務報告

### 行く人

北川 高生

令和6年4月より2年間、勤務の機会をいただき誠にありがとうございました。4月以降は、いであ株式会社での業務に専念することとなりました。

協会では「伊勢・三河湾栄養塩管理方針の検討」などの業務に携わらせていただきました。当方は水産学部卒とはいえ、防衛省で長く基地行政に従事してきた経歴であり、伊勢・三河湾における流動モデルの構築や、下水処理場等の管理運転による栄養塩供給の変化が漁業へ及ぼす影響といったテーマは、これまで想像することも

ありませんでした。そのため「土地勘」を掴めず苦勞した面もございました。

しかしながら、皆様の温かいご協力とご指導のおかげで、日々学びながら楽しく業務に取り組むことができました。心より感謝申し上げます。



## ▶ 編集後記

ウクライナ戦争の発生から4年が過ぎましたが、その間にもガザ（ハマス）とイスラエルの紛争など、世界情勢は依然として不安定な状況が続いています。さらにイラン情勢の緊迫化により国際原油価格が上昇し、元売りの卸価格が大幅に引き上げられた結果、3月16日時点のレギュラーガソリン（全国平均）が1リットルあたり190.8円に急騰したとのことでした。

こうした急激な価格上昇を受け、政府は「緊急的激変緩和措置」を発動し、3月19日から店頭価格を170円/ℓ以下に抑える方針を示しました。しかし、JFSTA NEWS No.98が発行される4月15日時点で、ガソリン価格がどの程度落ち着いているのかは依然として不透明です。燃料費の高騰が水産業に及ぼす影響は大きく、操業コストの増加や流通価格への波及が懸念されます。

4月から新年度が始まります。皆様にとって、今年度が実り多い一年となることを心よりお祈り申し上げます。

(TK)

### 一般社団法人 全国水産技術協会

〒105-0003  
東京都港区西新橋2-15-7 MSC西新橋ビル5F  
TEL 03-6459-1911 FAX 03-6459-1912  
E-mail zensuigikyo@jfsta.or.jp  
URL <https://jfsta.or.jp/>



### 東海・北陸支部

〒460-0002  
愛知県名古屋市中区丸の内3-4-10  
大津橋ビル6F  
TEL 052-228-9768  
FAX 052-228-9769